武藤重勝

―クリスチャン・詩人であり続けた図書館人―

寺﨑　昌男

『受験と学生』への投稿

その文章を見つけたとき、目を見張った。研究社資料室という変わった場所でだった。当時、『立教学院百二十五年史』編纂のため、研究社発行の雑誌『受験と学生』のバックナンバーに立教大学関係記事が出ていないかと検索していたのである。文章は「母校礼賛」という欄にあり、「自由の園の知識と魂の母」と題されていた。

「高く澄んだ秋空――なんだか遠くへでも行きたい心持ちで私達はよく郊外に出かける。東京に住む人達にはよく分ってくれるだらう。」

こう始まる文章の書き手は学生である。

「たまに、日曜などそんなゆっくりした気持ちで、池袋の駅を出て暫くでも歩いて見給へ。四五丁も町を抜けると、左手に素晴らしい赤煉瓦の洋館を見出すだらう。（中略）きっと誰でもそこに足を止めて、ここは一体何ですと近所の人に聞くに違ひない。それこそ、私が諸君達に紹介し様とする立教大学である」。

受験雑誌には珍しい叙情的な文章である。筆者は武藤重勝とある。編集室に戻ると「あとで立教に勤められた人ですよ」「図書館に勤めておられました」といった話を聞いた。調べようと思いながら作業を急ぐまま果たせなかった。右の文章だけは『立教学院百二十五年史』資料編第一巻に全文収めておいた。

さて筆者武藤氏は、立教への誘いを綴る。

――立教のモットーは「紳士になること」である。校舎前の芝生を囲む図書館とチャペル、この二つこそ知識の母、魂の母である。東京に官学は多々ある。しかしその中で立教の鐘の鳴る高塔は何を語るか。自由の扉は常に開かれている。

――学園の特徴は「自由の園」ということである。宗教も自由である。「礼拝堂に出這りしようがしまいが、又は、クリスチャンにならうがなるまいが、諸君たち自身の生活から割り出して、好いと思ふ方に進めばいい。大学はこの点で自由である。クリスト教徒も、又異教徒も常に同じく、抱含されて行く所に大学としての真面目もある。」

一九二七（昭和二）年一月号である。軍靴の音こそまだ遠かったが、文化・教育への統制は厳しい時期である。なのに、この文章は際だって伸びやかである。繰り返し出てくる「自由の園」「ゼントルマンの矜持」「自治生活の愉悦」「少人数の教育」「自由人」「文化人」「洋人教授」

「ピアノ」といった言葉は、当時の教育界では聞くのも稀だったと言えよう。『受験と学生』には多くの高校・専門学校生たちの「母校礼賛文」が載っているが、こうした言葉は他の文章には全くない。「自由の学府」という校風の起源について考えさせられる文であった。

図書館人として

略歴を振り返っておこう。

氏は一九〇四（明治三七）年に台湾で生まれた。宮崎県児湯郡高鍋町で少年時代を送り、東京府立三中（現・両国高校）、県立宮崎中学（旧制）を経て一九二五（大正十四）年四月に立教大学予科に入学している。履歴には「一九二七（昭和二）年文学部哲学科進学」とあるから、先の文を投稿したのは予科三年次生のときのことになる。

一九三〇年に大学を卒業し、直ちに本学図書館に勤務したが、一九四五（昭和二〇）年三月をもっていったん退職している。疎開のためであろうか。五月から敗戦を挟む四六年三月までは京都市立第三商業学校教員として修身、英語、公民を教えた。さらに敗戦後の一九四六年四月から四八年までは故郷高鍋市に帰り、県立高鍋中学校（旧制。後の高等学校）で英語・社会の教諭を勤めた。

ちなみに教員生活の基礎になったのは師範学校・旧制中学校・高等女学校の英語・修身教員の資格である。当時の制度では、この資格（免許状）は立教大学を卒業すれば無試験で取ることができた。当時の立教大学は「無試験検定」と称するこの資格授与権を文部省から認められていたのである。武藤氏は、一九四四年つまり卒業後一四年経った時点で右の教員資格を取得した、と履歴に記している。転職の際、改めて大学に申請したうえで免許状を得たものと思われるのである。

氏の第二の立教生活は、一九四九（昭和二四）年に再開される。この年四月、氏は立教大学司書に任ぜられ、直ちに副館長心得を命じられている。一九五一年二月には副図書館長になり、五八年度より新制度の司書に任ぜられ、五五年から六六年までは図書館事務課長を兼任、一九六九年三月、定年により退職するまでその職にあった。立教大学在職歴通算三六年のうち副図書館長歴一八年に及んだ。

在職中の最大の事件は、恐らく池袋の大学図書館の新築であったと思われる。丹下健三事務所による新築作業は、氏の大きな思い出であり、又誇りでもあったようである。「立教大学図書館」という文章を書いている。

「図書館は大学の心臓とはよくいわれている言葉だが、私たちは何とかして図書館をその言葉にふさわしい、位置も大学構内の中央に占め、外観内容ともに生き生

きとした図書館にしたいことを願った」

以下、設計者側との長期間の協議、参考室を初め本館のレイアウトの苦心、事務室の大幅な改善、そして大階段から上がった広場を屋上庭園にするというアイデアなど、池袋の大学図書館への尽きない愛着を語っている。氏はこの挙を他大学にも知らせたかったのであろう。『図書館雑誌』一九六一年六月号の右の論文は、前掲『資料編』の第二巻にも復刻されている。

氏の退職後、新座には保存書庫が新設され、かつての「新築」図書館にも狭隘の色が濃い。だが、氏の在職中はなお問題点よりは利点の方が大きかったであろう。

それはともかく、氏はまことに誠実な図書館指導者であったと思われる。新座図書館には、一九六〇年十一月から退職までの氏の日記が保存されているが、中身は図書館に関することで埋め尽くされている。

「閲覧室を見回ったが二つの点に気づいた。①ざわざわと騒がしい。出入りが激しい。そして室の中を颯爽と歩きすぎる。読書室の静かな雰囲気がまるでない。学生会館や自習室がまるで無いため、憩いの場、話し合う場、――そんなものが無いせいであろうと考えた。図書室の係りもそう話していた。②参考室の書棚の乱れがある。巻順に配置されていない。紛失か、まだ未刊なのか。――欠巻などがあったりするのが目立った。欠巻なら早く注文して補うこと。」

退職の前年、六八年四月二二日の記述である。

氏はいわゆる図書館界でも勤勉な活動家であったらしい。日本図書館学会に所属し、私立大学図書館協会研究部理事、日本図書館協会評議員などを永年勤めた。学内では、定年を挟んで一九七〇年まで、発足したばかりの司書課程の非常勤講師として「参考業務」「演習」等を担当した。小柄で穏和な、誠実熱心な先生だったということである。

詩人として

だが勤勉な図書館人というだけでは武藤氏を語ったことにはならない。氏は優れた詩人だった。

日本詩人クラブの会員で、詩作が『現代詩選』その他にも収録される、知られた詩人だった。詩作は早くから始まったようだが、没後、かつて図書館の同僚でやはり詩人である笠井剛氏（元就職部長）の手で詩集『武藤重勝遺稿詩集　日向（ひゅうが）』が刊行されている（東京、国文社、一九九一年）。笠井氏による「あとがき」には簡にして情を尽くした小伝が記されている。

笠井氏の示唆によって、武藤氏が『チャペル・ニュース』にしばしば詩を投稿していたことを知った。調

べてみると、確かにエッセー三編、詩作一七編が載せられている。詩はほとんど毎年のクリスマス向けのもので、復活祭に向けてのものも一、二編ある。敬虔な信仰ぶりをまことに平易な言葉で語る詩ばかりである。

私は詩作には全くの門外漢であるけれども、次のような章句で始まる定年の年の作「あのかたのために」などは、心ひかれるものの一つである（『チャペル・ニュース』一九六九年四月）

置き忘れたギターを
わたしは取りに行こう。

それは遠いところに
寂しく置かれている。
冬になると、
さらさらと雪の降る
それは、荒れた、つめたい、
遠い海べりのどこかに。
（以下略）

詩を読むと、武藤氏の心の原風景は、南九州の暖かい高鍋の町と少年のころ通った教会にあったことが分かる。長く編集委員を務めた『立教』にも数編のエッセーを発表しているが、その中には宮崎中学五年生のとき友人たちと「新しき村」を主宰していた武者小路実篤を訪ねたときの初々しい想い出の佳篇もある（三一号、一九六三年十二月）。

定年後は、かつて立教大学チャペルでオールターギルドを勤められたことがあるミヅノ夫人らとともに穏やかな読書と詩作の暮らしを送った。

一九七三年からは郷里高鍋市に戻った。悠々自適の生活一七年後の一九九〇年六月一九日、脳梗塞により逝去、享年八六歳であった。教名はマタイ。葬儀は、主教、司祭の司式により聖公会教区葬に準じるような格式で行われたという。

［付記］本稿を草するに当り、笠井剛・山中一弘・吉田晃久・風間まち子の各氏に教示を受けた。謝意を表する。

副館長当時の武藤重勝氏
写真提供・小関昌男氏